公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2022年（令和4年）6月5日
第709号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

中山 裕（ひろし）著
『アイヌの物語世界』に参加して

寺尾 智史

日頃、自分とは違う文化をもっている人たちを思い浮かべるとき、どうしても外国人のことだけ考えるくせがついているわたしにとって、そういう固定観念を解き放つ、いい頭の体操になるなと思って参加しました。

講座に参加して、その「頭の体操」はもっと根本的なものになりました。アイヌの人たちとはだれか、どんな生活をしてきたか、そしてどんな精神世界をもっているのか、それらのエッセンスを、短い時間なのに、どういうわけかじっくりとした――それは、後から振り返ってみれば、中川さんの汲めども尽きないアイヌ文化探究の泉からこんこんと湧いてくる語りの力でしたが――実感をもってお話をうかがい、アイヌの文化、そして、その鏡にうつる自分自身の文化の姿にはっとする、そんな大事な時間となりました。

まず、アイヌ語やアイヌ文化についての、貴重なアーカイブズにインターネット上で簡単にアクセスできることと、その方法を実地に見せてくれました。アーカイブズは活用されてこそ意味があることを実感できる機会となりました。

次に、アイヌ文化を体感するうえで、非常に重要なキーワード、カムイ（注1）について詳しく解説してもらいました。アイヌの人たちの精神世界を理解するには、ほんの入り口に立つようなわたしでも、彼女ら・彼らがカムイという概念を通じて、感謝したり、尊んだり、恐れたりしながら、自分が生きる環境の中で思い浮かぶ限りの他者の存在を意識しながら生活してきたことを知りました。ともすれば半径数メートル、ひどいときにはスマートフォンの画面にしか意識が及ばない、グローバルに世界中の情報に接しているようで実は狭い世界に閉じこもってしまっている自分自身を見つめ直しました。

アイヌの物語について、3つの語りのかたち――カムイユカラ（神謡）、ウエペケレ（散文説話）、ユカラ（英雄叙事詩）の、豊かな世界の一端を、色鮮やかに紹介してもらいました。

カムイユカラには多くの動物たちが、生き生きとした姿で自らがカムイとして語る形で登場しますが、そこにはアイヌの人たちの温かいまなざしが感じ取れ、カムイと人間であるアイヌとが織りなす、立体的で重奏的な奥行きを感じる、不思議な感覚を持ちました。語り手の中に、アオバトがいました。近場では湘南の大磯・照ヶ崎海岸に群れで現れることがあるそうです。コロナ禍が終わったら、中川さんから授かったあの感覚をもう一度感じに、そっと見に行きたいと思います。

ウエペケレとしては、「キムンアイヌの息子の話」を聞きました。その独特で一度聞けば忘れることのできない物語世界をひとことにまとめるだけの筆力を持ち得ませんが、驚いたのは、物語の舞台が、大きな川の流域伝いに、広い北海道を縦横に動くということです。アイヌの人たちの空間感覚を垣間見たようで、それだけに、「開拓」というたい文句で、アイヌの人たちの天地を、彼女ら・彼らに断りもないどころか、むりやりに分断した明治以降の歴史の推移にドキリとし、人ごとにはすまいと思いました。

アイヌ文化のとびらを、もっと気兼ねなく開く、素晴らしいきっかけをもちました。

イヤィライケレ！（ありがとうございました！）

（平凡社）

注1・・・アイヌの伝統的な考え方では、全てのものに魂（ラマッ）があると考えられており、その中でも特に意思をもって活動しているとみなせる人間以外のもの。

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

丸山俊一著『14歳からの資本主義』『14歳からの個人主義』「社会と個人の間にあるジレンマ」に参加して

石井亮

学生生活も終わりが近づき、いよいよ社会人生活が始まる。誰もが通る道なのだから、逃げてはいけないのだけれども社会という言葉からは漠然とした不安を感じてしまう。自分よりも職場を優先しなければいけないのか、仕事が人生のすべてなのか。そんなモヤモヤを抱えていた時期に本講座のポスターを見つけた。社会と個人の間にあるジレンマとは、まさに私が思い悩んでいたテーマ。また、お話は私が好んで見ている『欲望の資本主義』を手掛ける丸山俊一さん。ＮＨＫでも異色のプロデューサーと呼ばれ、型にはまらない番組を作り続けている彼にとってジレンマとは何なのか。興味を惹かれ、すぐに参加を申し込んだ。

出版社から何冊も執筆の依頼を受け、番組も作る。一体どんなイケイケのプロデューサーなのだろうと思っていたが、実際にご本人を拝見した時は非常に落ち着いており、腰の低い方という印象だった。講座は経済システムを作り上げてきた思想家の歴史から始まり、夏目漱石の個人主義など様々な人物の思想を欲望の資本主義の映像と共に紹介していく、というものだった。

丸山さんの番組や著作にいくつか触れてきて今回の講座を聞いた時、改めて思ったことがある。それは自身が多様性を愛し、他者の意見に寛容であるということだ。参加者からの質問の時、自らに否定的な意見が投げかけられても決して拒絶することはなく、むしろそういった意見を歓迎しているようにも感じられた。彼の番組や本でも、「これが正解である！」と断言することはなく、あくまでも受け手が自らの力で考えるための材料を多く示すという構成が多い。就職活動を通して、何か明確な答えを持っていなければならないという一種の強迫観念を持っていた私には丸山さんの考え方や問題に対するそういった姿勢が魅力的に思えた。むしろ、物事に正解があると思い込んでいるほうが間違いなのではないか。今の経済システムだって、歴史上の偉人たちの努力の賜物ではあるが格差や思想・世代間の断絶といった問題を抱え込んでいる不完全なものだ。だからこそ、一つの視点に囚われず多種多様な考えを持って問題に向き合うことが必要なのだ。ある種、多様な価値観というジレンマに陥らないと見えないものがあるのではないか。私はそう感じた。

明確な答えにたどり着くことをすぐに求めるのではなく、多様な意見を踏まえて考える過程に価値を見出して頑張ってみよう。私をそう勇気づけてくれる内容だった。次回も楽しみにしています。丸山さん、貴重なお話をありがとうございました。

（大和書房）

くにたちブッククラブ

― 感傷から遠く離れて ―

金原ひとみ『持たざる者』

（集英社文庫）

講　師　榎本 正樹
（文芸評論家・現代日本文学）

と　き　6月9日（木）
夜7時半～9時半

ところ　公民館 地下ホール

申込先　公民館 ☎(572)5141

＊次回は7月14日（木）
水上勉『雁の寺』
（新潮文庫）です。

新着図書から

〈総記〉
市民とつくる図書館　青柳英治（勉誠社）　011

〈哲学　心理学　宗教〉
視覚化する味覚　久野愛（岩波書店）　141
グッド・アンセスター　ローマン・クルツナリック（あすなろ書房）　141

〈歴史〉
ホロコーストとヒロシマ　加藤有子編（みすず書房）　234
鈴木天眼　高橋信雄（あけび書房）　289
アウシュヴィッツの小さな姉妹　タチアナ・ブッチ（アストラハウス）　289
世界史を歩く　南里章二（ナカニシヤ出版）　290
戦争とバスタオル　安田浩一（亜紀書房）　291

〈社会科学〉
くじ引き民主主義　吉田徹（光文社）　311
時給はいつも最低賃金、これって私のせいですか？　和田静香（左右社）　312
国会議員に聞いてみた。　ＭＯＭＥＮＴ　ＪＯＯＮ（岩波書店）　316
日本移民日記　中井治郎（ＰＨＰ研究所）　324
日本のふしぎな夫婦同姓　中野剛志（ダイヤモンド社）　332
変異する資本主義　岸政彦（筑摩書房）　365
東京の生活史　竹信三恵子（旬報社）　366
賃金破壊
自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見えた　清田隆之（扶桑社）　367き
生きづらさと男らしさのこと
フランスに学ぶジェンダー平等の推進と日本のこれから　冨士谷あつ子（明石書店）　367ふ
女性たちのフランス革命
クリスティーヌ・ル・ボゼック（慶應義塾大学出版会）　367ボ
シングルマザー、その後　黒川祥子（集英社）　369
女性移住者の生活困難と多文化ソーシャルワーク　南野奈津子（明石書店）　369
「感動ポルノ」と向き合う　好井裕明（岩波書店）　369
公立学校の外国籍教員　中島智子（明石書店）　374

〈自然科学〉
武蔵野発川っぷち生きもの観察記　若林輝（山と渓谷社）　462
海鳥と地球と人間　綿貫豊（築地書館）　488
海獣学者、クジラを解剖する。　田島木綿子（山と渓谷社）　489
「感染」の社会史　村上宏昭（中央公論新社）　493
自由の国と感染症　ヴェルナー・トレスケン（みすず書房）　498

〈産業〉
江戸前の海の物語　河野博（原書房）　662

〈芸術〉
ムスコ物語　ヤマザキマリ（幻冬舎）　726
バタフライ・エフェクト　マーカス・Ｊ・ムーア（河出書房新社）　764
検証コロナと五輪　吉見俊哉（河出書房新社）　780
一八〇秒の熱量　山本草介（双葉社）　788

〈言語〉
留学生のための近代文語文入門　庵功雄（スリーエーネットワーク）　810
うつりゆく日本語をよむ　今野真二（岩波書店）　810

〈文学〉
戦争と児童文学　繁内理恵（みすず書房）　909
寂聴さんに教わったこと　瀬尾まなほ（瀬尾まなほ）　910せ
忘却の野に春を想う　姜信子（白水社）　91き
月夜の森の梟　小池真理子（朝日新聞出版）　91こ
ミルクとコロナ　白岩玄（河出書房新社）　91し
銀座で逢ったひと　関容子（中央公論新社）　91せ
田辺聖子十八歳の日の記録　田辺聖子（文藝春秋）　91た
残照の頂　湊かなえ（幻冬舎）　91み
少女中国　濱田麻矢（岩波書店）　920
蝶のしるし　江鵝（作品社）　923
Ｊ・Ｍ・クッツェーと真実　くぼたのぞみ（白水社）　930
優しい語り手　オルガ・トカルチュク（岩波書店）　98ト

〈一節〉ジェリ・クインジオ著『鉄道の食事の歴史物語』

１８６８年にジョージ・Ｍ・プルマンが彼の最初の食堂車を「デルモニコ」と命名したとき、それは潜在的な顧客に向けた明らかなシグナルだった。「これは高級レストランである」。ニューヨークにある同じ名前の店は、アメリカでもっとも有名でかつ評価の高いレストランだった。デルモニコポテト（ゆでたじゃがいもにホワイトソースとチーズを混ぜてオーブンで焼いたもの）、ニューバーグ風ロブスター（バター、クリーム、卵、シェリー酒などで味つけされたロブスター料理）、チキン・ア・ラ・キング（チキンのクリームソース煮込み）、ベイクド・アラスカ（平たいケーキの上に山型にアイスクリームをのせてメレンゲで包み、焼き目をつけたデザート）はみな、そのレストランから生まれたものである。産業界の御曹司や王族がこぞってデルモニコスで食事をした。実業家のダイヤモンド・ジム・ブレディや女優のリリアン・ラッセルといった有名人もそこで、高級ワインを片手に、大量のカキから始まるディナーのいくつもの料理に舌鼓を打った。（原書房）

図書室のつどい

『既存の恋愛観に振り回されない〝プロヒモ〟幸福論』

講師　ふみくん（ライター）

近年、多様な生き方やパートナーシップをめぐる価値観があるなか、新しい生き方を模索されている人がいます。

「稼ぐこと」はパートナーに任せ、多少の仕事をしながら得意な家事やメンタルケアなどでパートナーをサポートする著者は、ご自身のことを〝プロヒモ〟と名乗ります。男性だからとバリバリ働くことに違和感を持ち、「男らしさ・女らしさ」から距離をとり、自分らしい価値観を突き詰めた結果、今の生き方・考え方にいき着いたそうです。

〝ヒモ〟という生き方に様々な声があるなかで、著者が追い求めるパートナーとのフェアな関係性や仕事観、既存の恋愛観からくる偏見への向き合い方などを知り、多様な生き方について考える機会にできればと思います。

〈講演者の著書〉『超プロヒモ理論 浮いた家賃は１０００万、寄生生活13年の逃げきり幸福論』（二見書房）

とき　６月18日（土）
朝10時～12時

ところ　公民館　３階講座室

定員　会場25名・オンライン30名　※申込先着順　会場は市内在住の方優先

申込　６月９日（木）朝９時～６月16日（木）夕５時
会場受講：公民館☎（572）5141
オンライン受講：sec_kominkan@city.kunitachi.lg.jp

オンライン受講申込メールへ記載する項目
【件名】図書室のつどい講座
【本文】①氏名 ②ふりがな ③住所 ④電話番号
※当日、参加者側の環境における接続や音声・映像の不具合のお問い合わせには対応できません。ご了承ください。

〈私の本棚から　第３回〉

NHK「やまと尼寺精進日記」制作班 著『やまと尼寺精進日記』

上原 真弓

みなさんは以前ＮＨＫ、Ｅテレで放送されていた「やまと尼寺精進日記」という番組をご存知でしょうか？その番組は奈良の山深いお寺で暮らす、２人の尼さんと１人のお手伝いさんの暮らしを追ったものでした。

山奥の尼寺暮らしと聞くと、人との交流の途絶えた寂しい生活なのかな、と想像される方も多いかもしれません。食べ物も質素なおかゆとお漬物で、生活を色で例えると白黒のモノトーン。しかしながら私がこの番組を見たときには、そんなイメージと真逆のものが画面に写っていました。

まず、山の木々や花が色鮮やかで美しい。また、独創的で美味しそうなお料理が次々出てきます。そして、山奥での生活なのに、支えているたくさんの人々との交わりに溢れているのです。それは、チャンネルを間違えて、地方の旅番組かお料理番組に合わせたのかと思ったほどで、とにかく全体的に明るくて、カラフルなのです！全然モノトーンなんかじゃありませんでした（笑）。

この本は、その番組をそのままぎゅっと閉じ込めたものです。

本の中に掲載されているレシピの中で、私が６月にいつも開くページがあります。それは「梅仕事」のページです。そこには梅の下ごしらえから、梅酒と梅味噌の仕込み、そしてそれらを使った「梅尽くし膳」がたくさんの写真で紹介されています。作っている様子の写真は、見ているだけで尼さんたちの話し声が聞こえてきそう！そして、それを見ながら何かひとつ、実際に自分の手を動かして作ってみると、美味しいだけでなく自分自身の生活を自分で作っている実感が湧いてきます。

東京で暮らす私は、コンビニで必要なものはすぐに手に入ります。デスクワークでパソコンをいじる仕事は、頭の中ばかり動いて身体が動いていないので運動不足気味です。そんな生活はそれなりに気に入っているのですが、たまに疑問が湧いてきます。「この生活は、本当の意味では豊かなのかな？」と。

そんなとき、不便なはずの尼寺暮らしがなんだかとても羨ましく感じるのです。不便だけれども工夫して、その日自分の手を動かしてやったことが目の前にはっきりわかる。そうして出来上がったもので人が喜んでくれる暮らしのことを。

そんな時にはこの本を開いて、自分の手を動かしてみます。そうして自分の生活を、目の前に取り戻していくのです。それと同時に、お寺の持つパワーが私にお裾分けされた気がして、なんだか元気になるのです。（ＮＨＫ出版）